



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3/TEL 045-774-9861
洋光台キリスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人会代表 金子 敬
●事務局長 播磨 聡 (広島キリスト教会 TEL 082-293-8683)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

巻頭言

播磨 聡

はりま さとし

広島キリスト教会牧師

事務局長就任のご挨拶

微力な者であります。吉高叶事務局長の後を継ぐことになりました。結成以来、ご尽力なされた吉高氏に感謝いたします。

私は佐々木和之さんと約25年のお付き合いになります。鹿児島教会牧師として私が赴任した時、教会員であった佐々木さんは、エチオピアで農業指導者として働かれていました。内戦の最中には、その心痛をお聞きし、祈りを共にしました。内戦はそれまでの佐々木さんの活動に大きな打撃を与えました。そして、佐々木さんの働きは、農業指導から、地域共同体構築のための指導者育成へ、さらに平和と和解の取り組みへと広げられていきました。根源的問題として人間を扱うようになったとも言えるでしょう。それも、学者としてではなく、現地の人と同じ空気を吸い、同じ食べ物を食べ、同じ時代を生きる中で、広げられたものであります。佐々木さんは、ルワンダに住む人々と、そこで起きる出来事に根ざして、日々聖書を読み、私たちにその思いを伝えてくれます。その働きは、宣教「ミッション」そのものです。

「クリスチャンが90%を超えるルワ

ンダで、なぜ虐殺が起こったのか」と尋ねた時、佐々木さんが「恐怖が支配する時に人は狂う」と表現されたことがありました。人は、不安や恐れに支配される時、心の奥底に隠れている狂気が表出します。クリスチャンかどうかの問題ではありません。全ての人間が抱える問題であって、ルワンダの虐殺の出来事と、私が深く結びつけられる言葉となりました。

虐殺加害者と被害者が、和解へと歩み出す佐々木さんの報告には、いつも驚きと感動を覚えます。その背後には、想像を超える苦悩と葛藤があることでしょう。それでも、そこから新しい人の創造(ローマ8章18節以下)が始まっています。佐々木さんの活動は、現実課題、たとえば、不安や恐れを伴う閉鎖的個人主義、経済至上価値観における富の問題、竹島・尖閣・北方等の領土問題における所有への執着、力による対立等において、私たちに示唆と希望を与えます。

不安、恐れ、対立、憎しみが、非暴力の手段で和解に至り、平和と共生の世界へと向かうために、支える会の皆様と共に、佐々木さんの働きを支え、佐々木さんから学び、考え続けてまいりましょう。

佐々木和之

ささきかずゆき

悔い改め、赦しを求めるところから

大虐殺から19年。

和解と共生への歩みを続ける人々、平和構築について熱心に学ぶ若者たちに励まされています。

日本は今、緑が美しい季節ですね。皆さまいかがお過ごしでしょうか。ルワンダは今、雨期の真っ最中。ひときわ緑が映える季節ですが、今年は多雨のために地方によっては洪水の被害が出ています。

ルワンダは先週（4月7日～13日）、ジェノサイドを記念する特別な週でした。7日と13日は全日、8日から12日までは午後からの仕事が休みになり、犠牲者追悼行事やルワンダの歴史とジェノサイドに関する学習会が開かれました。

ルワンダで追悼週を過ごすのは、私にとって9回目のこととなりますが、今年もあらためてジェノサイドは過去のことではない、との印象を強く受けています。昨日、ピアスで同僚のフォーチュネさんが、「今日は私が家族と会った最後の日なの」、とつぶやくように言いました。昨日は、当時まだ高校生くらいの年ごろであった彼女が、愛する家族と離別した人生の中で最も辛く悲しい日だったのです。私の多くの同僚たちが、友人たちが、そして学生たちが、今この時、家族と離別した19年前のあの日を思い起こしながら過ごしています。



〈ンハラマで続く 償いの家造り〉

■ブタレに引っ越しました！

2月にルワンダ南部の中心都市、ブタレ（Butare）に引っ越しました！首都キガリから南に約130キロ、車で2時間15分くらいのところです。私が勤めるピアス（Protestant Institute of Arts and Social Sciences, 略称PIASS）から徒歩5分のところにある、ルワンダの比較的古い家にはめずらしい、窓が大きくて明るい家です。私が使っている部屋で雨漏りするのが玉にきずですが（入居前に大家さんが修理してくれたはずなのですが…）、庭には立派なアカシアの木があり、恵も私もそれがとても気に入っています。

ブタレは人口約8万人の小都市ですが、ベルギーによる植民統治時代にはルワンダの首都として栄え、現在も教育・研究機関が集まる学術都市として知られています。カトリック教会の大聖堂をはじめ、植民統治期の建造物が数多く残っていたり、国立大学キャンパスのまわりに森があったりして、落ち着いた雰囲気のある良い町です。

とってもおいしい自家焙煎のコーヒーが飲める「カフェ・コネクション」（平和構築を専攻する私の学生の一人が店番をしています！）やルワンダーとの評判が高いアイスクリームのお店もあるので、ぜひ一度おいでください。

■和解の現場・訪問ツアー

後ほどさらに詳しい報告がありますが、去る2月25日から3月7日、「佐々木さんを支援する会」主催の「ルワンダ和解の現

場・訪問ツアー」が実施され、日本全国から10名もの方々がルワンダを訪ねてくださいました。盛りだくさんのプログラムで、あっという間の10日間ではありましたが、NGOリーチ（Reconciliation Evangelism And Christian Healing, 略称REACH）が支援している「和解の現場」で生きる人々、ピースで平和構築を専攻する学生たち、そして、ピース・インターナショナル・スクールの子もたちと、心の通った交流ができました。

第二回目の訪問ツアーをぜひ2年以内には実施できればと願っています。「次回ぜひ参加したい」、と思われる皆さまは、ぜひ事務局までご連絡ください。



ニヤマタ虐殺記念教会で
被害者の話を聞くツアー参加者

■養豚プロジェクトがスタート！

2月下旬、リーチが2007年以来、「償いのプロジェクト」を続けてきた東部県キレヘ郡で、日本の皆さまからの支援金を用いての養豚プロジェクトが始まりました！「養豚？」、といぶかしがる方もおられそうですが、そう養豚です。このプロジェクトの正式名称は、「キレヘ協働養豚プロジェクト」。「償いのプロジェクト」を通して和解と共生への大きな一歩を踏み出した人々が、副収入の確保と堆肥の確保という目的のために共に働くプロジェクトです。

ジェノサイドの被害者と加害者が共通の目的のために力を合わせて働くなど、数年前までは絵空事でしかありませんで



<建設が始まった豚舎の前で>

した。しかし、加害者たちが被害者のための家造りに一生懸命取り組んできたキレヘ郡のガフゾ村とルガンド村では、2011年になると新しい風が吹き始めました。リーチの活動を通して関係修復を果たした人たちが、加害者と被害者の区別なしに誰でも参加できる協働グループを結成し、将来の活動のために毎月の会費を積み立て始めました。そして2012年には、豚3頭を共同購入したのでした。リーチは、この画期的な動きを後押しするために、「協働養豚プロジェクト」への支援を決めたのです。

ガフゾ村の協働グループは、「ドゥハラニレ・ウブムエ・ヌブギユング」（一致と和解に励もう！）という名で、虐殺加害者25名、虐殺生存被害者10名、虐殺被害者の親族3名からなる計38名が参加しています。ルガンド村の協働グループ、「アバハラニラ・アマホロ」（平和のために労する者たち）は、虐殺加害者21名と虐殺生存被害者5名からなる計26名で結成されました。これらの名前が示す



<養豚プロジェクト材木運びにも参加>

通り、協働グループを結成した人々は、「和解のつとめに仕える」(新約聖書 コリントの信徒への手紙 二 5:17-20) ことを自らのアイデンティティーとしているのです。

現在、メンバー総出で豚舎の建設が進められ、第一号が5月末に完成予定。今後、家畜飼育と共同組合運営に関するトレーニングを実施していくこととなります。

■平和構築コースがより賑やかに！

ピアスでの活動に関して、今回は明るい話題がたくさんあります！まず第一に、「平和構築と開発」専攻コースで学ぶ学生たちが、第1期生6名(男性4名、女性2名)第2期生16名(男性11名、女性5名)、第3期生20名(男性14名、女性6名)と、少しずつ増えてきました！来週、専攻を選択する第4期生が加わると、平和構築を専攻する学生たちの総数が70名を突破することになりそうです！

第二に、長いこと探し求めていたルワンダ人の専任教員がついに見つかりました！タンザニアで生まれ育ち、南アフリカの神学校に進んだ後、三人の子育てをしながら学びを続け、平和学の修士号と開発学の博士号を取得したパワフルな女性、ペニーナさんです。昨年まで南アフリカの大学で講師をされていましたが、「祖国で平和の働きに仕えていきたい」との思いから、雇用条件の劣るピアスの教員になることを決意されました。

第三に、韓国の方々との具体的な協働が始まりました！まず今年の1月から、教師経験18年の韓国人、ヘイヨンさんが教養科目の一つである数学を教え始められました。彼女は2年間の任期で派遣された、KOICA(韓国国際協力機構)の国際協力ボランティアです。さらに、来月から私の友人のサンフーンさんが、国際関係論の非常勤講師を引き受けてくださることになりました。サンフーンさんは、国際NGOの職員として、ウガンダ、ケニア、コンゴ民主共和国、ルワンダ等の現場で20年以

上働いてこられた、国際協力の大ベテランです。彼が大学・大学院共に国際関係論を専攻されたことを知り、頼み込んでピアスで教えていただくことになりました。

第四に、この3月から日本人学生がピアスで学び始めました！ピアス初の日本人留学生になったのは、加藤麗(うらら)さん。3年間通った日本の大学を1年間休学し、今年の12月まで「平和構築と開発」専攻コースで学ばれます。アフリカの外から来た留学生は彼女が初めてということもあり、学生たちは彼女の存在をととても喜んでいます。次号ではぜひ彼女の留学生レポートを掲載したいと思えますのでお楽しみに。



〈非暴力コミュニケーションワークショップ〉

■今、問われていること

少し前のこととなりますが、ルワンダで与えられている韓国の方々とのお交わりについてご報告します。昨年のアドベントに、ルワンダ在住の韓国人の方々が集う日曜礼拝(参加者約80名)で初めてメッセージをさせていただきました。

「光は闇の中に輝いている。そして、闇はこれに勝たなかった」(新約聖書 ヨハネによる福音書1:5)との箇所を読み、ルワンダ人クリスチャンの赦しと和解への歩みが、恐れと憎しみという心の闇の中にキリストの光を灯して生きていこうと決意した人々の歩みであること、そして私たちも、その真の光を心に灯すようにと招かれている、とのお話しをさせてい

いただきました。

メッセージの冒頭で、侵略戦争と植民地支配により朝鮮半島の人々に大きな苦しみを負わせてきたにも関わらず、それらを正当化しようとする言説の絶えない日本の国民として、韓国の人々への謝罪の思いをお伝えしました。これで良いと言えるような言葉ではなかったかと思えます。しかし、集っておられた多くの方々が、私の言葉を温かく受けとめてくださったのでした。

それから約1週間後、ある年配の礼拝出席者の一人から「クリスマスおめでとう」とのメールが届きました。そこには、「あなたが届けてくれたメッセージは、私自身が日本に対する赦しと和解へ歩みだすきっかけになりました。…本当にありがとうございます」、との言葉が綴られていました。

その後、今度は在ルワンダ韓国人教会の世話役である、友人のサンフーンさんからメールが届きました。「声明文を昨日の礼拝で読み上げました。そこに集っていた多くの韓国人が、間違いなく日本人への偏見を改めたと思います…」

サンフーンさんの言う「声明文」とは、2010年に出されたバプテスト連盟理事会声明、「日韓強制併合」100年の悔い改めのことです。「ぜひ読みたいので送ってほしい」と言う彼に、声明文の韓国語版を渡していたのでした。

私は、「歴史を振り返り、そのあやまちを悔い改め、赦しを求めると共に、未来を拓くための決意」として発せられたその声明が、韓国の兄弟姉妹の心に届き得たことを喜び、感謝します。しかし同時に、その声明を公にした日本バプテスト連盟の一信徒としての責任が、今このとき、厳しく問われていると感じます。

安倍自民党政権は発足早々、日本軍「慰安婦」に関する「河野談話」の見直しの動きを明らかにしました。さらに文部科学省は、高校授業料無償化の対象から朝鮮学校を除外する方針を打ち出しま

した。そして昨日(4月23日)、「春季例大祭」にあわせ、168人も国会議員が靖国神社に参拝しました。

私たちは、これ以上歴史を歪め、朝鮮半島出身の方々の尊厳を踏みにじる動きが強化されていくのを許すのでしょうか？

「悔い改め」の声明において私たちは、日本が朝鮮半島の人々から「土地を奪い、食料を奪い、言葉を奪い、名前を奪い、性を奪い、尊厳を奪い、信仰を奪い、生命と文化を破壊し尽くし」、「それらの侵略行為の前に立ちはだかることをせず、主告白を歪め、福音の証を曲げ、隣人たちの血と涙と死を生み出すことに荷担してしまった」罪を悔い改め、「朝鮮半島に生きる主にある兄弟姉妹、「在日」教会の兄弟姉妹との交わりの中で、共に生かされていくことを心から祈り求めます」、との声明を公にしたのです。そして、その謝罪と決意を受けとめ、「赦しと和解への歩み」を始めてくださった韓国の兄弟姉妹が確かにおられるのです。

私たちは今こそ、「古い人を脱ぎ捨て、心の深みまで新たにされて」(新約聖書エフェソの信徒への手紙4:22-23)生きることができるようせつに祈り、励ましあい、行動していかなければなりません。

■吉高事務局長のお働きに感謝！

支援会発足当初から会の運営を支えてくださった吉高叶事務局長が、昨年度をもって退任されました。2003年の年末、私がルワンダで働くことを決意した直後、その意思を最初にお伝えしたのが吉高牧師でした。それ以来、現地に立たされている私の良い理解者として、私の働きを支え続けてくださいました。あれから10年以上が過ぎましたが、吉高牧師のご尽力なしに今の働きはあり得ませんでした。長い間、本当にありがとうございます。これからもご支援・ご助言をよろしくお願いいたします。

ルワンダ和解の現場・訪問ツアー

2013年2月25日～3月7日、「佐々木さんを支援する会」主催でルワンダを訪問しました。全国からの参加者10名と共に、虐殺現場を訪ね、その悲劇を心に刻み、佐々木さんのプロジェクト現場を見学しました。

皆さまのお祈りを感謝しつつ、お二人の参加者の感想をご紹介します。

ルワンダと出会って

北村 裕樹

日本基督教団 林間つきみ野教会牧師

「ルワンダに行ってみたくない？」

その一言がまた新しい扉を開いた。正直に告白すると、映画くらいでしか知らなかった。和解プログラムに従事する人たちがいると聞いたことがあったが、遠い存在だった。もちろん、佐々木和之さんの存在も「支援する会」の存在も。

そんな私が「ルワンダ・和解の現場訪問ツアー」に参加させていただく。ちょっと後ろめたさがあったが、言葉にできないほどたくさんさんの経験が待っていた。イメージとわずかな映像だけで形作られていたルワンダ像が音を立てて崩れていった。

1994年の悲劇から19年を迎えようとするルワンダ社会。そこからどのように未来に向かっていくのか、手探りで前へ進んでいる。もちろん全て良いことばかりではない。善悪両面ある中で、過去と向き合おうとする人たちがいる。その現実の一端を知った。

全てが初対面・初体験の緊張の中で、最も印象に残ったこと。それは「和解はプロセスである」ということ。明日には崩れてしまうかもしれない関係を、恐れずにつなぎ止め続けること。理解したのではない。そう体感した。これは、私たちの社会が一番苦手とすることなのでは



＜ピアスの学生とツアー参加者＞

ないか。全てを水に流し、なかったことにしてしまう。和解の前提条件となる「現実と向き合う」ことをせず、「対話」もせず、ただ過去を「なかったこと」にして、未来に進もうとする。それが果たして本当に目指すべき未来なのかもわからないままに。そして、誰も責任を取らず、一人一人の当事者意識も薄まってしまい、うやむやなまま足だけが前へと押し出されていく。

今回、それだけが過去の清算方法ではないと知った自分が、これからどんな働きをさせてもらえるのかはわからない。それでも、当事者ではない世代が、どのように過去の問題と向き合っていくか、ヒントをもらった気がする。少しでも、より豊かな未来に向かって用いられたいと心から願った。

ルワンダを知ることは、今自分が置かれている現実を知ること。ルワンダの取り組みを知ることは、今自分の目の前の問題との取り組みを考えること。ルワンダの平和と和解を祈りながら、今日、まずは目の前の現実に向き合おうと思う。

新しい出会いに感謝。

「愛の霊」を選んだ人々

荻原 美世子

洋光台教会員

佐々木和之さんに案内されて、虐殺記念施設、ニヤマタ教会、償いの家作りの現場、石鹼工房、養豚プロジェクト、カヨンザ青年平和構築プロジェクト、ピース・インターナショナル・スクール、プロテスタント人文社会科学大学（略称／ピラス）などを訪問しました。償いの家作りの現場では日干し煉瓦作りを、養豚プロジェクトでは養豚小屋の丸太運びの手伝いをしました。

ニヤマタの教会で、ベアトリスさんの体験を聞きました。彼女は茂みに隠れながら「もし生き残ったら、この出来事を語れるように」と神様に祈ったそうです。

体を動かし、手で触れ、目で見、空気を吸い、耳で聞き、個々人で感じる日々でした。互いに「謝罪」「許し」を決意した方々の働きが、周辺の人々に良い影響を与え、形となって見えていました。

その一つの出来事を紹介します。養豚プロジェクトでのことです。「償いの家作り」に参加し、刑期を終えた後も進んで「家作り」の働きを申し出た人々と、そこに進んで加わった被害者側のグループに起きた事柄です。

ベスティーヌさんは、進んで家作りに加わった被害者側の方です。彼女は、REACHの癒しと和解のプログラムを受けた人ではありません。ラジオ放送でREACHの活動を知り、自ら連絡を取り、受け入れられ働きに加わったそうです。それまで一人だった彼女は、孤独から解放され、悩みがあれば、メンバーからアドバイスを受けて生活するようになったと話しておられました。



<ベスティーヌさん>



<家造りで泥のバケツリレー>

そうした中、ともに働く人々の生活基盤向上のために養豚のプロジェクトが検討されていました。彼女は、その用地を提供したのです。敢えて言えば、被害者が加害者のために自らの財産を提供したことになります。しかし、彼女らは、区別するのではなく、むしろ一つとなって前へ進もうとしているように思えます。

それぞれが揺れ動くこと無く生活しているとは思いません。けれど「謝罪・許し」を決意したことにより与えられた、主にある平安を受け続けようと、肉の思いでなく、霊によって歩いておられるのだと思います。彼、彼女らは、「恐れる霊」ではなく「愛の霊」を選んだのです。

ニヤマタのベアトリスさんや石鹼工房の女性たちもカヨンザの青年達も一つとなって歩む姿を体現しています。そして、彼らが神様の側を選び取る支え、目に見える伴走者がREACHの方々であり、佐々木和之さん、なのだと思います。それは、多くの現場で異口同音に、感謝の言葉とともに聞かれました。「私達とともに、歩んでくれた。」と。

教会に繋がり、信仰により導かれてはいますが、多くの困難や苦しみ、整理できない突然の動揺を、ともに寄り添い励まし導くREACHのリーダー達（司祭も多くおられる）。その中で、彼らに実利が感じられ、尚且つ、私達に見える形の働きを企画し労された佐々木さんを通して、私達も彼らの奇跡の業に参加できている恵みを感謝いたします。

事務局からお知らせ

- これまで事務局長を担われた吉高叶さん（栗ヶ沢教会前牧師）は、4月より日本バプテスト連盟常務理事となりました。お働きをお祈りいたします。
- 「佐々木さんを支援する会」世話人として、新たに中條智子さん（三島教会牧師）が加わりました。世話人として中條智子さんの抱負の言葉をご紹介します。

新しく世話人会に加わることとなりました。どうぞよろしく申し上げます。

手元に創刊号からのウプムエがあります。佐々木さんの発信は、いつも私の小さな思いを超えていました。佐々木さんが出会うお一人お一人に物語があります。生きて働かれるイエス・キリストの慰めと癒しを受け、力づけられ、和解を担う人となっていく物語です。それが聞く私たちの心を揺さぶり、ルワンダに無関心でいられなくなり、神さまのみわざに目が離せなくなっていくのでしょうか。多くの方たちが支援者であり続けてくださる理由が、ここにあると思います。

さらに多くの方にこの佐々木さんの働きを知っていただきたい、支援の輪をひろげていきたいと願っています。（中條智子 三島バプテスト教会牧師）

- 佐々木和之さんは、ルワンダのプロテスタント人文社会科学大学の平和・紛争研究学科の教員、また、REACHのプログラム・アドバイザーの働きを担い、草の根の「癒しと和解プログラム」への支援をおこなっています。新たに、キレヘ郡での養豚プロジェクトや、アフリカ大湖地域の平和構築アクター（NGO、教会、政府機関）との連携構築等の働きも始まりました。今後とも、皆さまのご支援をよろしく申し上げます。

新たに支援をくださった方々です。感謝致します。

（'12年8月1日～'13年4月9日）

鯉沼真理・麻美、久保田信義、天野有、泊野照美、杉下寿里、清水麻友、貝塚百合子、平方悦子、南九州小羊会（宮崎教会）、帯広教会、橋本佳子、日キ奈良教会、福谷真知子、石川雄治、志岐美恵子、学校法人東京第一バプテスト学園こひつじ幼稚園、北野収、福島旭町キリスト教会、喜多純子、日本バプテスト連盟金沢キリスト教会、北星学園スミス・ミッションセンター、齊藤公子、有馬和子、杉山望、北村裕樹（以上敬称略、受付日付順）

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

佐々木さんの活動報告、写真館、等。
HPから入会手続きも可能です。

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 金子 敬（古賀教会牧師）、中條智子（三島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、村上千代（日本バプテスト女性連合幹事）、播磨 聡（広島教会牧師）